



88120149



International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Tuesday 13 November 2012 (morning)
Mardi 13 novembre 2012 (matin)
Martes 13 de noviembre de 2012 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is *[25 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[25 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[25 puntos]*.

次の 1 の文章と 2 の詩のうち、どちらか一つを選んでコメント(解説文)を書きなさい。

1.

初め、暗闇が全てだった。果てしなく暗い空間が続くだけだった。そこには一条の光さえな
 かった。無。……音も無かった。匂いもなかった。平でもなく、凹んでいるわけでも出っばつてい
 るわけでもなかった。点でも線でも、球でもなかった。閉ざされた容器の内側でもなければ、その
 外側でもなかった。時間でもなければ、次元でもなかった。振れているわけでもなく、まっ直ぐな
 5 わけでもなかった。はしまりもなく、縁や果てがあるわけでもなかった。全体というわけでもなく、
 かといって、一部分というわけでもなかった。

僕は、そこにいた。(いるという表現が、どれほど適切な言葉かはわからないが、存在する、
 という表現よりは適切な気がする。)

10 そことはどこか?……わからない。でも、誰かがいて、何かを今にも伝えようとしている気
 がした。ここで待つていればいいのかも。その時僕はそう考えていた。

僕の瞳は閉じていた。まだ開く必要性はないような気がした。何かが始まるまで、待つていれば
 いい。何かの順番を待つている。そんな感じがしたのだ。

15 最初に現われたのは、イメージだった。しかしそれは形ではなかった。デザインでもなかった。
 生きるということのヴァイジョンのように、曖昧^{あいまい}模^も糊^ことした展望のようなものだった。一定のリズム
 を持った鼓動が響きはじめた。不快ではなかった。何かを呼び起こすような、そして目覚めさせる
 ようなビートを持っていた。ずっと聞いていたいと思うような音の連続だった。正確にそれは一定
 だった。つまり、保たれている、ということ。それがその時の僕には、とても大切な気がしたのだ。
 保たれている、ということが。そのことをもつと考え、認識しなくてはならないと思った。

20 もしかしたら、それが僕の最初の思考かもしれない。飛び越えてはいけない。次には、そういう
 ことを考えていた。僕はいつのまにか、意志を持つようになっていたのだ。それが、どこからやつ
 て来たのか、見当もつかない。思考や意志は、気がついたら、宿っていたのだ。

暗闇が僕に何かを伝えだしたのは、その頃だった。思考や意志が、僕をその暗闇に存在させはじ
 めた頃のことだ。一つ一つのメッセージは、瞬間的にかつ膨大^{ぼうだい}な情報を含んでいた。何とその量の
 多かつたことか。無意味だと感じるくらい、それは多かつた。

25 そして、それは全てが理解を超えていた。意味を超越していた。まさに、流れ^かだった。歴史とい
 う見方もできたと思う。絶え間ない連なりだった。僕は最初つから、それらを理解しようと思死に
 なっていた。しかし、いくら努力しても、そのとぎれることのない流れを理解することは不可能だ
 つたのだ。

そして僕は、結局完全に諦め、ある時、それらを受け入れていくことにした。事は単純だった。

30 理解するのではなく、受け入れるということだったのだ。

膨大な情報は、そのほとんどが教訓だった。教訓は選択を、選択は淘汰を促した。多くの情報がふるいにかけて、細かい網目から漏れていった。ふるいの網目は更に細かく、より小さくなっていった。その選択はどんどん頂上を目指し、一つの確かな結論に導かれていた。

そして、淘汰は次の段階へ進むことになったのだ。……

35 暗闇ははじめて僕に具体的な命題を提示してきたのである。

“進化せよ。……”

必要にせまられてのことか、期限的な制約のせい、何かの保持のためか、あるいは破壊のためか、僕にはわからない。しかし僕は、それに従うしかなかった。逆らうこともできたのだが、反抗とか反乱とか反逆とか、そういうレベルではなかったのだ。もう、そういう段階ではなかった。

40 “受け入れる” このことが、とても重要な意味を持っていた。

僕は、疑うことも、迷うこともなく、それらのことを全て実直に受け入れていった。それまでの価値や環境や基準がいかなるものであってもである。僕の中には、いつのまにか新しい秩序とおぼしき基準が芽生えはじめていた。

45 しかし、その新しい流れは、暗闇全体からすれば、見落としてしまいそうな一点だったかもしれない。鶏卵に滲む一筋の血のようなものだ。革命というのは、常に狂気を隠している。僕の中に滲んだ一筋の血の存在を、知るものは、神だけなのかもしれない。

(辻仁成 『カイのおもちや箱』 一九九一年)

(注)

曖昧模糊 物事がぼんやりしていて、はっきりしないさま。

淘汰 環境・条件などに適応するものが残存し、そうでないものが死滅する現象。

2.

スイッチ

引くスイッチを
 まちがえて押しているうちに
 十年、二十年がたつ
 ということもある

5 われわれは
 そんな間違いをおかしながら
 すわったり
 とびはねたり
 音を出したりしているのだ

10 ひねるスイッチで
 カチツといかせたあとの「ため」が足りなくて
 そのスイッチは入っていなかった
 それに気づくのに
 十年、二十年かかる
 15 という場合もある

スイッチ自体はけつして興奮しない
 悪態をつくこともない
 ムチャヤをされてこわれても
 泣かないのだ

20 この世界はスイッチだらけだ
 重要なスイッチもあれば
 どうでもいいスイッチもある
 で、どうでもいいスイッチの入れ方が
 十年、二十年たつて
 25 やつとわかって
 妙にうれしかったりすることもあるのだ

ぼくは
 ちよつと触れただけで
 勝手に入ったり切れたりする
 30 過敏なスイッチが
 苦手だ

(福間健二 「スイッチ」 『結婚入門』 一九八九年)